UNIVERSITY OF CAMBRIDGE

ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS, PART II

Japanese Studies

Tuesday 3 June 2014 09.00 – 12.00

J.12 MODERN JAPANESE TEXTS 3

*Candidates should answer **ONE** question from section A and **TWO** questions from section B.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS
20 Page Answer Book x 1
Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS
The dictionary *Shinjigen* will be available

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator.

SECTION A

Translate **ONE** of the following passages taken from **unseen** texts into **English**:
[40 marks each]

(1)

東海道電化記念の切手

家のすべての雨戸は固く閉じられたまま何日も経っていました。父も母も、ふたりの子供も、家のなかでじっとして、外出もしないでいるのです。

台風が来ているわけではありません。外は良い天気です。原因は神戸のおじいちゃん、つまりおとうさんのおとうさんが、奄美まで私たちに会いにきたので、何をそんなに嫌がったのか、母がおじいちゃんを嫌がって、家族で家の中に籠城する命令を出しているからです。

おとなたちの間にどんな確執があるのかは知りませんでしたが、小学三年生の私は偵察係にさせられて、朝こっそりとパンを買いに出かけるついでに隣の親戚の家へ行っておじいちゃんがどうしているかの情報を集めて、母へ報告するのです。きのうはタケシおじさんの病院へ私たちの様子を聞きに行ったとか、お金をハルおばさんに預けたとかです。こんな時になるとだらしない父は、ベッドに潜ったまま出てきません。

おじいちゃんは、街の宿に泊まっていて、毎日やって来て、私たちに会おうとしましたが、ついにできませんでした。いいえ、最後の日に私は、雨戸の破れた所から手を出しておじいちゃんの手を握りました。妹のマヤも戸の穴からおじいちゃんと握手しました。

「しんぞう、元気でな、また来るからな」

と言って、おじいちゃんは神戸へ帰っていきました。めったに泣かない私はその時も泣きませんでした。だって、また会えると信じていたからです。

おじいちゃんは、その後、私に手紙を何度かくれましたが、母が読んで捨ててしまいましたので、たまたま彼女が居ないときに受け取った一通だけが私に届きました。それには、何度も手紙を出したが読んでくれたかと書いてあったので、母の仕業がわかったのです。

その手紙には東海道電化の記念切手が封筒の左下に糊でしっかりと貼ってありました。そこには、カズちゃんに連れられて東京駅を出発した時に列車を牽引していたであろう、流線型の電気機関車が描かれていました。

でも、おじいちゃんは私が大学生の時に死んでしまいました。

私は東京の美術学校へ通うようになっていたので、当時は京都に住んでいたおじいちゃんに会おうと思えば夏休みの行き帰りに立ち寄ることができたのですが、母がまだ禁止していたのです。ですから、おじいちゃんが死んだのさえも知りませんでした。夏休みの帰省で奄美に帰ったとき、母が、

「おとうさんは、お風呂で泣いていた」

Question 1 continued…

と言ったので、一年前におじいちゃんが他界したことを初めて知ったのです。
私は、とても残念でした。表情には出しませんでしたがとても怒りました。おそまきながらも私はその冬、京都のおじいちゃんの家に行き、おじいちゃんの家族に会いました。そして、とても悔やみました。どうしてもっと早く勇気を出して京都へ来なかったんだと。
おじいちゃんからの手紙に貼ってあった東海道電化の記念切手は、私の切手収集の一番最初の記念切手となっていました。

奄美	Amami (Ōshima island)
籠城する	to confine oneself indoors
流線型	streamline(d)

SHIMAO SHINZŌ, ‘Tōkaidō denka kinen no kitte’, in *Ogawa Yōko no hen’ai tanpen bako* (2009), pp. 222–24.

(2)

近代化に成功した
初めての非西洋国家

日本はアジア大陸の沖合に浮かぶ島国である。古くから世界で最も進んだ文明の一つであった中国文明圏の外縁部に，この島国は位置する。当然ながら，中国文明から多くの影響を受けてきた。外交史的に注目されるのは，それでいてこの島国が中華帝国の諸王朝の支配を受けず，自立性を保ち続けたことである。それは，日本を取り巻く海の持つ二重の機能によって可能となった。すなわち，海は一方で「自然の濠（ほり）」であり，とりわけ科学技術が未発達な段階では，外部の力が直接支配することを困難にする。他方で海は「交通路」であり，日本が外部文明から学ぶことを可能にする。自立性を保ちつつ交流し学ぶこと，それが日本の外部文明との関係における基本型であった。日本社会の発展や文化の成熟は，そうした中国文明との間合いによって可能となった。

産業革命を経た近代西洋文明は，人類史上初めての世界文明であった。その比類なき力が極東に迫ってきた19世紀中葉は，長く強盛を誇った清王朝がたまたま衰退期に向かう時期であった。西洋文明の挑戦に対する巨人・中国の対応が緩慢であったのに対し，1853年の黒船襲来によって鎖国を破られた島国・日本は，激しく動き始めた。近代西洋文明に対する日本の対応は，古来，中国文明に対して築いてきた方式と同じく，学習しつつ自立性を保つものであった。「攘夷」と「開国」の間で日本政治は引き裂かれたが，「攘夷」は外部文明に対する自立性を，「開国」は外部から学ぶ必要を語ってい

Question 2 continued…

た。序章で述べたように，明治の日本はトインビーが「ヘロデ主義」と名づけた方式をもって，西洋文明の力の秘密を学び取りつつ西洋の圧力から自らを守った。それを通して，非西洋社会の中で初めて近代化に成功したことが，戦前日本の世界史的役割であった。

軍事帝国の滅亡

大きな成功に，大きな失敗が続いた。世界史が脱帝国主義の局面に入った第一次世界大戦ごろから，アジアにおいても反植民地主義ナショナリズムの波がうねり始めた。日清・日露の戦勝を経て既得権を持つ日本帝国からすれば，条約によって合意した「正当な」日本の権益を，中国人がデモや暴動によって脅かすのは，邪悪な違法行為であった。「持てる」西洋列強の強大さを意識し，それとの対抗に腐心する日本の軍エリートからすれば，日本はまだまだ「持たざる」小帝国であり，さらなる拡充を求め続けねばならなかった。日本も幕末明治以来の不平等条約に苦しんだが，近代化の実を示しつつ列強とねばり強く交渉し，平和的に解決した。中国もそうすべきである，というのが日本の条約遵守派の言い分であった。しかし中国人からすれば，日本の「正当な既得権」なるものは，力づくで中国人の意に反して奪ったものにすぎない。反英を軸とした中国ナショナリズムは，1928年の第2次山東出兵ごろから反日を中心テーマとするに至る。

こうして，1930年代に中国との戦争を終えることができず戦線拡大を続けた日本は，やがて資源を求めて南進し，南進はついに対米戦争へと連なった。この時代の日本は，「大東亜共栄圏」や「八紘一宇」を語り，国際環境を自らの意のままに一方的に変えようとするアジア唯一の軍事帝国であった。その際限ない軍事力行使の末に日本帝国は，1945年に廃墟の中の敗戦に至った。

清王朝 Qing Dynasty
攘夷 Expulsion of foreigners

IOKIBE MAKOTO (ed.), *Sengo Nihon gaikōshi* (2006), pp. 280-81.

SECTION B

Translate **TWO** of the following passages taken from **seen** texts into **English**: [30 marks each]

(3)

「権利の上にねむる者」

学生時代に末弘(厳太郎)先生から民法の講義をきいたとき「時効」という制度について次のように説明されたのを覚えています。金を借りて催促されないのをいいことにして、ネコババをきめこむ不心得者がトクをして、気の弱い善人の貸し手が結局損をするという結果になるのはずいぶん不人情な話のように思われるけれども、この規定の根拠には、権利の上に長くねむっている者は民法の保護に値しないという趣旨も含まれている、というお話だったのです。この説明に私はなるほどと思うと同時に「権利の上にねむる者」という言葉が妙に強く印象に残りました。いま考えてみると、請求する行為によって時効を中断しない限り、たんに自分は債権者であるという位置に安住していると、ついには債権を喪失するというロジックのなかには、一民法の法理にとどまらないきわめて重大な意味がひそんでいるように思われます。

たとえば、日本国憲法の第十二条を開いてみましょう。そこには「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によってこれを保持しなければならない」と記されてあります。この規定は基本的人権が「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」であるという憲法第九十七条の宣言と対応しておりまして、自由獲得の歴史的なプロセスを、いわば将来に向って投射したものだといえるのですが、そこにさきほどの「時効」について見たものと、いちじるしく共通する精神を読みとることは、それほど無理でも困難でもないでしょう。つまり、この憲法の規定を若干読みかえてみますと、「国民はいまや主権者となった、しかし主権者であることに安住して、その権利の行使を怠っていると、ある朝目ざめてみると、もはや主権者でなくなっているといった事態が起るぞ」という警告になっているわけなのです。これは大げさな威嚇でもなければ教科書ふうの空疎な説教でもありません。それこそナポレオン三世のクーデターからヒットラーの権力掌握に至るまで、最近百年の西欧民主主義の血塗られた道程がさし示している歴史的教訓にほかならないのです。

MARUYAMA MASAO, '"De aru" koto to "suru" koto', in *Nihon no shisō* (1961), pp.154–56.

(4)

余り良い傾向とは思えないのだが、このところ、自分の心ばかりを相手にして暮らしている、――詰まり創作ばかりをしているからなのだろう、心の外側に騒々しく展開している世の中に対して、えらく冷め切った気持ちになってしまっている。別に反社会的と言う程でも無いけれども、こうした傾向は、今の世の中の健康な思想から言えば良くない事だと思う。

商社が多国籍企業から金を取って政治家に献金したのが悪いの何のと騒いでいる。一体何を騒ぐのかと思う。商社は読んで字の如く金を儲けるだけが目的の会社という組織である。別に修身の先生でも聖者でも無かろう。儲けるためには何でもする

Question 4 continued…

のが仕事の彼等にとっては、金であれば、それが国民の税金であろうが、落ちていた金であろうが知った事では無いのだろう。ロマンも何もあったものでは無いのが当然である。政治家に献金する事が金儲けに有利ならば、当然献金も持ち掛けるだろう。受ける側の政治家が宜しく無いと言うなら、そんな金を受け取るような粗悪な者を政治家として当選させた日本国民が粗悪だからだろう。騒ぐという天に唾する行為に耽る位ならば、もっと前に彼等の本質を何故見抜かないのかと思う。見れば判るじゃないか、と言いたくなる。

政治家と金の問題が跡を絶たず、その事を騒ぎ続けるけれども、こんな事は、政治家である事に金が掛かる現実と、分けても選挙に尨大な金が掛かる仕組みを改善しない限り、跡を絶つ訳が無い。詰まり原因はもう一つ前にあるのだから、起こって来る個々の事件に目くじらを立てるよりは、仕組みの改善を急ぐ可きだと思う。

この頃は何事につけても、自分達の安全で快適な生活を守る権利を主張する事が恰も流行のように盛んで、日本人独特の土地にべったりの感覚もそこに加わって、地域エゴとでも言うのか、住民主体の運動が強く、その事を否定はしないが、僕のように自分の住んでいる地域に興味は持っても、必要以上に地域に愛情を持たない人間には理解し難い事が多い。工場の隣りに住んで工場の煤煙に憤り、飛行場の近隣に住んで飛行機の騒音に憤る暇があったなら、僕ならさっさと何処かへ引越してしまうだろう。工場の操業や飛行機の発着は多くの人のために大切だと思うからである。こういう事を言うと、今の世の中ではすぐに叱られるのが常識になっているが、僕はそう思うのだから致し方無い。貴方は貴方、僕は僕。考えが違って、それで良いのである。

DAN IKUMA, ‘Ken’en ken’, in *Nao katsu Paipu no kemuri* (1982), pp. 5-7.

(5)

1 「冷戦の勝者」日本の「敗北」

冷戦の終結した1989年は，世界に占める日本経済の比重が極大値を指した瞬間であった。石油危機後の不況から70年代末に立ち直った日本経済は，80年代を通じて主要工業生産の分野で断然たる強さを示し，米欧の追随を許さなかった。経済国家としての戦後日本がピークを迎えていたのである。80年代を迎えたころの日本は「1割国家」であったが（第5章*1*参照），80年代を終えるころには世界経済の15%を占めるに至っていた。

そうであれば，冷戦終結直後の米国に，「今後の脅威はソ連ではなく日本である」といった世論調査結果が出たり，「冷戦の真の勝者はアメリカではなく，日本とドイツである」といった論評が現れたりしたのも不思議ではなかった。戦略的対立を主要テーマとする二極体制が過ぎ去れば，従来以上に経済力が重要となろうと想定された。経済超大国・日本は，その潮流の中でいっそう輝くことができるであろうか。1990年7月のヒューストン・サミットには，その可能性を予感させるところもあった。

サミットを前に日本外交は，米欧のメンバー国に対して，前年6月の天安門事件で国際的非難を浴びた中国について，いつまでも国際的に孤立させてはならないと制裁解除のイニシアティブをとった。G.ブッシュ米大統領は同意し，人権問題の重大さゆえに慎重であった西欧諸国も，やがて基本的に同調した。天安門事件以後の東アジア国際関係において，「平常への復帰」を日本外交がリードしたのである。経済大国が政治的重みをもアジアで持つのが趨勢（すうせい）なのであろうか。

Question 5 continued…

湾岸危機／戦争

実は，日本が「冷戦の勝者」であるとの評は正確ではなかった。日本は冷戦を中心的に戦っての勝者ではなく，できるだけ戦うことを回避しつつ，冷戦体制の反射的利益を享受して，最大受益者となったにすぎなかった。主体的勝者と受益者の差は大きい。そのことを如実に示したのが，湾岸危機に際しての日本の対応力の欠如であった。

湾岸危機に際して日本が問われたのは，外交技術や外交能力の問題であるよりも，日本人の国際認識の枠組みそのものであった。戦後日本は憲法9条を奉じて，平和に至上の価値を認めてきた。戦後日本は，自衛戦争が許されるか否かを本気で議論する世界で唯一の社会であった。国民の圧倒的多数が自衛隊を容認するに至ったが（図3－2参照），野党第一党の社会党を中心とする革新勢力は，強固に自衛戦争と自衛隊を否定し続けた。しかも野党第一党の原理的反対は，国会の機能を麻痺（まひ）させることができた。米国の安全保障の下で，通商と経済の仕事を全うすることを最重要と考える政府与党は，現実に沿った安全保障政策を提起して野党を刺激することを避けてきた。その結果，戦争か平和か，軍国主義復活か民主主義か，侵略か自衛かといった，激しくはあったが観念的な1950年代の二分法の議論に国民の安全保障認識はとどまっていた。戦後日本国民の心の辞書には，戦争は2種類，侵略戦争と自衛戦争のみとなっていた。

IOKIBE MAKOTO (ed.), *Sengo Nihon gaikōshi* (2006), pp. 235-37.

END OF PAPER